

税と向き合い考える

合志市立西合志南中学校 3年 原 弘明

令和二年七月。九州地方で豪雨災害が発生。私の住む熊本県でも大きな被害があった。幸い、私の住む地域では被害はほとんどなかったが、他地域では、浸水や土砂崩れなどが起こり、甚大な被害を受けた。

このことを受けて、私の中学校では募金活動を開始した。生徒が主体となり、総額十五万円の募金を集めることができ、このお金は無事、被害を受けた中学校へ届けられた。しかし、自分の中で何か引っかかるものがあった。

十五万円、という金額は、私たちにとっては悪い結果ではなかったと思う。しかし、受け取る側からすれば、この金額は大きくない。思いは十分に伝わるが、支援としては小さな支援だ、という悔しい気持ちがあった。

豪雨災害発生から約一ヶ月後。政府が約一〇〇〇億円の支援策を打ち出した。この時、税金がどれほど凄いものなのか気付いた。

私たちがいくら頑張っても十五万円しか集められなかったのに対し、一〇〇〇億円の支援金はすぐに用意された。そんなの当たり前、と思うかもしれないが、「税金」という制度がなかったらこのような多額のお金はすぐに用意できないであろう。

このように、税金があることで緊急事態の時も、すぐに支援の手を差しだせる。ただしこれができるのは私たちが税金を払っているからだ。

では、なぜ私たちは税金を払うのだろうか。法律で納税の義務があるからなのか、払わないと何か面倒臭いことになるからなのか。確かに、その考え方も分かるが、こう考えてみたらどうだろうか。「人を助けるためだ」と。今回の豪雨災害への政府の支援金もそうだ。私たちが払った税金が大きな支援となっているのだ。自分一人では、何かしたくてもできることはほとんどないが、「税金を納める」ことで人々を助けている、という考え方も持ってほしいと思う。

これからの社会を担っていくのは我々だ。これから少子高齢化が進んでいき、生産年齢人口が減少し、老年人口が増加していくであろう。二〇二〇年現在、高齢者一人を支えているのが二・一人に対し、五年後には一・八人になるだろうと考えられている。それに伴って、税金への考え方も変化していくであろう。将来を背負う我々が、しっかり税と向き合っていくことが大切で、より良い社会づくりにつながってくるのではと思う。